

〈トーン(tone)、モチーフ(motif)、フレーズ(phrase)、メロディ(melody)〉

当技法では、筆者的パターンイメージを提示するために4～12小節の旋律を付けています。これは、コード伴奏だけだったら音楽的に解りにくかったりする対象者へのちょっとした道案内のつもりです。音楽提供者のイメージで変更OKですし、むしろイメージメロディを奏でぬほうが良い時もあるでしょう。音楽の学問のなかに『旋律学』というものがあるそうです。本書は厳密な学問はさておき、メロディを形成するプロセスというものを少し考えてみたいと思います。というのは、実際の即興場面で対象者が発する音は、それだけを取り出せば音楽的に成立しない成分が多々含まれています。しかし、伴奏と一体となればそれは“音楽”としてなるべく成立するようにコードで支えることを目指しています。たとえば、単音をポーンと出しても響き合う、その瞬間の音をトーンとすれば、そのトーンがもう少し連続性を持って繋がる過程が、モチーフ、フレーズ(楽句)、メロディ(旋律)、というふうに徐々に情緒性を伴って成長(統合)されていくと発達的に考えられないでしょうか？言い方を変えれば人体の最小単位が細胞でそれが機能的に統合されていくと組織(例;粘膜)、器官(胃)、系(消化器系)となります。トーン⇒メロディの方向性が成長なら、メロディ⇒トーンは退行(分化)方向というわけです。本法でテーマとしている課題は、対象者の発するトーン～フレーズぐらいの間にあるものを引き出そう(残りをコードで支えて音楽としてはOK!)と考えています。なぜなら4分音符でド～シ～ラ～ソ～、というモチーフ(フレーズ)には、いろんなコードが付く猶予(隙間)が残されていますが、完成度を伴ったメロディにはコードの付けようも限定されてしまいます。既成曲の合奏などで音を外したらあまり音楽的でなくなります。対象者との即興では、未分化な音でフレーズを奏でてくれたり、むしろちょっとした単音(トーン)を入れてくれたほうが音楽的で格好良かったりするからです。技法の説明で述べましたが、“禅問答のようにメロディを奏でようとするとうまくいかず、伴奏のリズム性にのればうまくいく”というあたりが本法の狙い目だったりします。

〈リズム〉

本法では、ワンコードパターンや2コードパターンを意識的に避け、なるべく循環性を持った提示を行っています(ほんの一部例外あり)。たとえばリズム性においてファンクや16ビートのアプローチをすれば1～2コードパターンのほうが良い感じだったりします。思春期のクライアントなどにはヒットすることと思います。さすがにコンピュータソフトやピアノだけでの提示では困難であったためそうしたのですが、実際の活動ではリズムボックスや集団性などを活かしてそのようなパターンもジャンジャン試したら面白いと思います。また、各パターンのリズムをいろいろと工夫してみるのも良いでしょう。筆者的には今さらながら3拍子は意外と使えると感じています。

〈循環しない音楽〉

先日TVを見ていたらボリビアの民族音楽をやっていました。言い古されたことですが循環する音楽、コード音楽などは、資本主義を背景とした西洋社会の今日的状況であって、さまざまな音楽のほんの一部だと自虐的にも考えたりしています。もっと人に感じるリアルな音楽、音楽活動(療法)で使える音楽は山ほどあるでしょう。ただこのようなコード音楽を知っていたほうが、よりそれら感じる音楽に出合うきっかけになると思います。